

続・3つの「ワーク」②フットワーク

企業経営漫談士 岡野実空

「続・3つのワーク」の2回目は、「ヘッドワーク」に続く「フットワーク」。それは、自分の頭の「よ・つ・や」の一端が、他人に見える体の「動き」のこと。またその良し悪しの判定基準は、「的確性」「敏捷性」「自主性」の3要素です。今回のコラムは、新型コロナウイルス禍で図らずも露呈した、そのさまざまな問題点から、今後の「フットワーク」の要諦を考えます。

(次回は「ネットワーク」の予定)

要素1: 的確性

「フットワーク」に求められる要素は、まず「的確性」。そもそも組織として定めた制度や規則は、大半が平常時を想定したもの。しかし非常時に発生するのは、それに該当しないことばかりです。また平時のように、現場の状況を上司にフィードバックし、逐一判断を仰いで行動している余裕などなく、即断即決で動くことが求められます。

そんなときこそ、現場に精通したミドルの出番。そのためには、平時にさまざまな事態を「想定」し、ときには本来の「役割」を超えて「対応」するシミュレーションを積み重ねて、その発生に備えるしかありません。またそのネタは、毎日飛び込んで来る社内外の情報やニュース。自ら関わる組織でそれが起きたら、どう判断し、どのように行動するのか？ 激動の時代の「想定外」とは、自分や組織の視野や思考の範囲の狭さの証明なのです。

要素2: 敏捷性

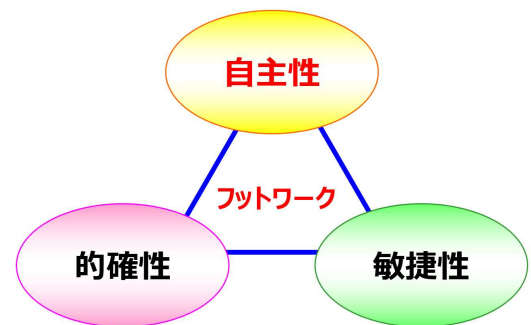
「フットワーク」2番目の要素は、「敏捷性」。上記シミュレーションの場合、その原因分析や対策検討にたっぷり時間をかけられますが、いざ緊急事態となれば、決断の「早さ」と、行動の「速さ」が勝負になります。多くの場合、それが遅れたことによって、傷口が広がってしまうからです。

しかし皮肉なことに、しばしばその阻害要因となるのは、頭の「よさ」。問題の原因から対策まで幅広く考えられ、その「完璧」な解決を目指すあまり、それを見切って判断する「勇気」に欠けるのです。下積み経験が培うのは、その現場体験。それは、いざというときに求められる、頭の「つよさ」や「やわらかさ」の訓練の積み重ねに他なりません。

政治経済ばかりでなく、地球環境も「激動期」にも入ったいま、非常時に際しての「フットワーク」は、企業ミドルの必須条件になったのです。

要素3: 自主性

z-08 「フットワーク」の3要素



さて「フットワーク」3つ目の要素は、企業人に最も不足している「自主性」。実際、各社の研究会の幹事は、社内ではかなり「フットワーク」の良い方々ですが、それでも大半は「受け身」。次回の研究テーマを、自ら提案することは極めて稀でした。

因みに、私もその一人である団塊世代は、その巨大な見本。戦後の高度成長期に育ち、欧米というモデルを改善するという「フットワーク」だけで、一時は“Japan as No.1”という幻想まで抱いた身です。しかしその塊が第一線を退く際のアンケート結果には、思わず苦笑い。なぜなら、その職業人生を振り返る中で、「自分から言い出して達成したものがない」ことが断然トップで、一時世界を震撼させた団体戦とは裏腹に、個人としての「達成感」のなさをひたすら後悔していたからです。

それは皆さんにとっても、決して他人事ではありません。団塊世代の限界と弊害が浮き彫りになった「失われた四半世紀」に、その影響下にある一連の教育を受け、社会人としてもその後遺症に巻き込まれ続け、今日に至っているからです。

現在のコロナ禍は、その呪縛と決別する絶好の機会。今後、団塊以上の世代には、これまで自ら抱え込んだ巨額負債の返済に専念し、個人戦の「達成感」を味わってもらいましょう。

「自主性」が備わった「ヘッドワーク」と「フットワーク」で、新たな時代を切り開くのは、もちろん皆さんです。

2021年2月15日 実空

☞『三々な経営』 1-1 「大変」な時代